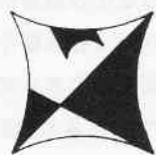




第46回全道造形教育研究大会

札幌大会特集 1996



北海道 造形教育 連盟報

No. 103 1996.12.21 発行

発行 北海道造形教育連盟

事務局 〒063 札幌市西区発寒10条4丁目

札幌市立発寒小学校 吉田 倭雄

☎ 011-661-2521

『生きる力』に対する札幌のはじめの一步である

研究部長 菅原 清 貴

(札幌市立三角山小学校 教諭)

1. はじめに……「開かれた学校」への先駆けの大会

次世紀の学校教育に対して「生きる力」を育てる教育への転換を進めようとしている。この「生きる力」とは様々な問題行動に走る子供の増大に対して、共通に欠落している次のような資質獲得を期待しての方向である。

- ・思いやり、優しさ、正義感
- ・強い意志、社会性
- ・物を大切にすることなど
- ・自己に対する価値観、個性

これらを「生きる力」として育てる必要があるとされている。これは、学校だけでなく家庭や地域の教育力の向上を期待するなかで、すべてを学校に任せようとしていたこれまでの反省に立ち、学校教育のゆとりとスリム化を実現させる方策として打ち出されてきた。したがって、学校は一層家庭や地域に対して開かれた場であり、学習の場、文化発信の場としての役割を果たす必要がある。今回の全道造形教育研究大会・札幌大会は、このような21世紀の学校教育に対する期待と関心の中で開催された。造形教育が、果たす役割がこの今日的教育課題に対して、どう力となるのかを示す場であった。

2. 基本コンセプトからの総括

大会主題…愛を土台に造形教育が果たす大切な役割をキーワードとして掲げ、その言葉を具現化する授業づくりと環境設定がなされた。つまり『愛・感・美・遊・創』は、造形教育を通して育てる札幌の「生きる力」に対する解答への第一歩であり、この主題を土台とした実践発表は、『札幌の主張』として提案したいと考えた。

大会の特色となった2日間の場の設定…大会2日間の場づくりについては、次のようなコンセプトでのぞんだ。

- ・領域や分野そして学校種の壁をすべて取り払う。
 - ・参加者が学びたいと考える内容を自由選択。
 - ・他の芸術文化機関との共同で考える造形教育。
- これらの柱建てから、
- ・学校種の壁を取り払い『8つの扉』による場の設定。
 - ・エントランス、エグジットフリーの構想。
 - ・階段式時間設定の授業公開。
 - ・座長を中心としたバイキング式分科会の設定。
 - ・全道の仲間と知り合うグルーピング交流会。
 - ・美術館との共同でつくる造形教育の可能性追及。

これらの具体的な試みは、これまでにない未知への挑戦であり、不安と期待の中大会当日をむかえた。

3. 多くの教訓と示唆…そして、21世紀への指針が

造形連盟では、20年ほど前「しなやかな子供」という言葉が生まれている。現在「やわらかな感性」が「生きる力」をかたちづくる大切な力であると、示されている。それは、アートインスクールの考えに基づき校舎内外を美しく整備することから始める必要があるとされている。今回の会場校であった、山鼻小学校も札幌みなみ幼稚園も自校の教職員のご尽力に加え、札幌の造形教育を担う新しい力である多くの教師と子供たちの作品でうめられた。何よりも、全体会場である体育館を山鼻小学校全児童が、汗だくになって造形活動を楽しみ、その活動の産物である作品で飾っていただいたことは、瑞々しい感動であり、アートインスクール具現化の先進的取り組みであった。

階段式授業公開においては、子供の主体的活動に沿って、子供主体に考え出されたアイデアであり、今後様々な研究大会に波及していく可能性を感じる。「時間がないから急ぎましょう」という教師の言葉は、この授業公開からは聞かれなかった。また、参加者も多くの授業の導入部分を見ることができたなど、価値ある設定であったと考える。

バイキング式分科会は、一問一答式の質疑からの脱皮と『8つの扉』の内容的深まりを期待して設定したものである。従来の提言方式の発表の他実技研修やコンピューターの実演さらに造形作家によるミニ講演会等幼稚園から高等学校までの教師が、経験豊富な座長の名調子に導かれながら、時間の経つのも忘れ楽しみながら造形教育の本質に迫ることができたものと思う。

2日目の美術館での様々な取り組みに関しては、記念講演会や鑑賞授業の内容的な充実が素晴らしく、美術館側のご尽力と合わせ我々の想像した以上の成果をもたらしてくれたと感謝する。

4. おわりに

今回の大会は、札幌連が発足しまもなくの大会であった。組織的にまだ弱体な部分を、多くの先生の献身的な不眠不休の仕事でカバーしてきた。とりわけ札幌教中学美術の先生とは、基本案作成から共に悩み支えあって大会をつくってきた。この力は「教師としての生きる力」そのものであり、この姿が子供たちに伝わり感じてくれたのであれば「なすことによって学ぶ」そのものであり「生きる力」に対する始めの一步にもなると考える。

札幌大会から感じて

北海道教育大学附属函館中学校 佐々木 善憲

第46回の全道造形教育の札幌大会の大会主題である「造形＝愛・感・美・遊・創」とは一体どんな風に展開されるのだろうか。何となくは理解できても、実際に行ってみて来ないと実感できないだろうという思いで札幌を訪れました。

そして、そこに展開された階段式の公開授業をはじめとし、出入り自由の分科会、まさに造形教育の「創」の精神だな、と一人感心していたのは、わたしだけではなかったように思います。

分科会と名がつくと何故か堅苦しさを覚えてしまうものですが、逆にこの「8つの扉」の解放感に戸惑いを感じつつ、2、3の扉に入らせてもらいました。「8つの扉」の中身についても、今自分が深めてみたい、考えてみたい、聞いてみたい、語ってみたい、という興味を誘う内容がありました。また、助言者ではなく“座長”との一味違う“場”での話し合いには一体感があり、「新たな造形教育の可能性を試す」という意気込みと、他の教科にはまねできない造形教育ならではの発想を感じておりました。

授業の話し合い、提言、実技研修と、先生方の選択により研修を深めたり、広めたりできるという一つの試みとして有効であったのではないのでしょうか。

また、毎年の大会でもそうですが、小・中学校問わず、全道各地の先生方の貴重な実践や提言にふれることのできる絶好の機会であり、自分にとってよい刺激となります。今年は「感」を「美」を「遊」を「創」を「心の引き出し」にしまって持ち帰ることができました。

今度は、これらを自分自身の造形教育活動へと還元していければ(当然のことながら“愛”をわすれずに)、まさに、大会参加の意義が生きてくるというものです。

今、社会、情報、文化の広がりの中で、造形教育もまた広がっているのも事実です。この大会での私もまた広がりを感じ、その奥行きを痛感しました。今後も実践を積み重ねていきたいものと思っています。

札幌大会、ありがとうございました。

札幌市立藻岩南小学校 鈴木 和男

この度の札幌大会の成功、心よりお喜びいたします。

会場に入り、まず強く感じたことは、これだけの大きな規模にもかかわらず、細やかな心配りが随所に見られた運営のすばらしさでした。8ドアーズのコンセプトにそった“バイキング”方式では図工科参観で特に見てみたい導入時を見易くとの配慮に立って、“時差階段型メニュー”が設定されたり、リアルタイムに発行される“速報”等、いろんな革新的なアイデアと実行力の冴えが大会を支えていました。

教室では、構想・製作・鑑賞さまざまな場面での意欲的な授業が展開され、これもじっくり見たいがああ先生のあの授業も…といううれしいジレンマに悩みました。

また、普段は小学校という器でしか授業をとらえることのない私としては、この機会に中学校の子どもたちや先生方の意欲的な実践の姿に触れ、視野を広めることができ、分科会の話し合いもとても有意義でした。

会場の空間全体が回遊式的美術館であり、テーマパークであるかのような印象のもと、言わば私自身の「実践を見直す」きっかけとなる日、それが1日目でした。

2日目は私にとって「教養を見直す」日でした。美術館とタイアップしたプログラム、特に楽しみにしていた伊藤 恵先生の講演では軽妙なお話の中に表れる「子どもへの思い」や「技」の大切さの一端に触れ、とても感激いたしました。

「実践」と「教養」へのたゆまない蓄積への新たなきっかけを与えてくれた多くのメニュー。お腹いっぱい味わえて私の心に確かな栄養となった2日間でした。

最後に、暑い中、熱い心で大会を支え、運営にかかわった多くの先生方、この日の授業のために遠くから参加して授業公開して下さった各学校の授業者の先生と子どもたちに厚くお礼と感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。本当にありがとうございました。

愛について

愛はいろいろ「これが愛だ」と指すことは難しいが《愛》を〈生を育む力、異なったものを結びつける契機〉と定義したい。しかし愛がいつも生を育み、幸福をもたらすとはと限らない。偏った一途な愛が、思考を妨げ、異なりを排除し、時には自らを、他人を不幸に陥れることもある。愛は十分に命取りとなる。《愛》が《我と汝》の共生へ向けての生きた知恵となることを祈りたい。

我と汝

〈貴方あっての私、私あっての貴方、互いにそう言える間柄のこと〉この結びつきこそ、自己と他者の根源的、本来的な在り方であるとM・ブーバーは説いた。人は自分一人だけの力で《我》となるわけではない。他者と出会い、他者と向き合うことによって《我》を形づくっていく。他者の発見が自己の発見につらなり他者の把握の深まりが自己の深まりへと導いていく。そのように《我》とは関係的な存在である。

(哲学用語辞典より)

札幌大会から感じて

苫小牧市立啓北中学校 佐藤 理香

日頃、私は「楽しい授業」「制作に熱中する授業」を目指しているのに「かたくるしい授業」をしてしまいます。今年の造形大会では、生徒が瞳を輝かせる場面はどこで、そこには教師のどのような動きがあるのかを勉強したいと思って参加しました。

今年は授業開始時刻をずらして設定されていたため、数多く参観することができ、大変勉強になりました。

なかでも「〇〇の頭をつくろう」での生徒達のいきいとした表情が印象的でした。私の勤めている中学校は、学級数24と規模が大きく、授業進度や作品の保管場所の確保、評価などを考えてしまい、「やってみたいな」と思いつつもこのような教材に取り組んでいませんでした。しかし分科会で学校の規模が同じ位だと知り、取り組み方なんだぁ…と勉強不足を反省しました。制作過程で発見があり、喜びがあり、楽しいと感じる教材を掘り起こし、組み立てている授業でなければ私が悩んでいた「かたくるしい授業」からは抜け出せないのだ、発想の転換が必要なんだ！そうだ、私がまず変わらなきゃだめなんだよなぁ、と強く思いました。

どの授業にも共通していた「あそび」ですが、新聞紙が授業のなかで海から熊に変わってしまうとか、作った魚で釣りが出来るとか、みんなで楽しむスペースに変わるなど、自分達で手をかけて生まれ変わった作品であそぶ実践は、みていてとても楽しいものでした。

また、プール・ペットボトル・色水でどういう授業になっていくのかワクワクした小学校の実践は、見て楽しんだりするだけでなく、絵画の授業などで混色をする時に体験したことが活かされていくのだらうと思います。

考えて工夫してものをつくるのって楽しい、と思える授業をやりたいな、と意欲の沸いた札幌大会でした。運営・授業等の先生方、ありがとうございました。

札幌市立大通小学校 山下由紀子

“図工の大会なんて、なんか楽しそうだな”という大きな期待感を胸に、参加させていただきました。

会場につき、校内に足を一步踏み入れたとたん、飾られている作品たちが、私に話しかけてきました。「ねえ素敵でしょ。」「どれが本物だと思う？」創った子供たちの思いが私の心を捕らえて、放してくれません。そして私は、この時ほど、カメラを持ってこなかったことを後悔したことはありませんでした。

廊下で、階段で、何度も足止めをくいながらも、ようやく体育館に到着し、さらにビックリ！子供たちが思い思いに作品を創っています。低学年の子供たちは、たてわりのグループの中で自分の思いを思い切り表現しています。どの子ものびのびと、話したり、切ったり、貼ったりしていました。高学年の子供たちは、クラスごとに自分たちの思いを作品にしています。大きな作品をみんなで創りあげようとする思いが、作業をする子どもたち様子から感じられました。どの場面にも共通して、先生の役目はアドバイスと困ったときの助け役。常に子供が主役なのです。子供ひとりひとりの思いは違っていても、学校のもんで創るんだという思いと、それを大きな手で抱き抱えているような先生たちの思いが、体育館の中にみなぎっていて、とても強い一体感を感じました。

楽しみにしていたバイキング式分科会。私は『造形と環境』の扉に参加させていただきました。作品を創る時には、材料や道具を重視していた私でしたが、この分科会で、環境というものがいかに子供の意識を左右しているかということがわかりました。提言して下さった先生たちは、実践されたものを紹介して下さり、自分自身も考えたいような身近なお話を聞くことができました。バイキング式だったのですが、造形と環境の扉だけで密度の濃い学習ができました。

最後になりましたが、夏休みの最中に、研究大会を持って下さった造形連盟の先生方にお礼を申し上げます。ありがとうございました。

美術館『近くて遠い』から『近くて便利』へ

札幌市立桑園小学校 松原 和彦

今までは、すぐ近くにありながらその有効な利用方法がわからず、『近くて遠い』近代美術館でした。

午前の「アートレッスン」では、今まで美術館に子どもたちをつれていくと、つい『静かに…』『さわっては…』など、いろいろ気を使い、そんなにしてまでと思いがちだった点についても、ワークシートやクイズ、劇化など、学芸員の方々の事前の準備や指導、観覧してまわる時の子どもたちとのやり取りなどから、ちょっとした工夫、発想の転

換によって解決できるということを学ぶことができました。また、子どもたちも美術作品を見る良さと共に『楽しさ』も体験できたようです。

午後の「造形ワークショップ」では、広場を開放していただいた活動。これも、子どもたちの活動意欲を大いに刺激する内容で、夏の暑い陽射しのなかにもかかわらず、3時間近く子どもたちは夢中になって小石を運んでは並べ、楽しく活動していました。子どもたちはのびのびと『楽しい美術館』を、わたしにとっては『近くて便利な美術館』を体験することができました。

新しい歩み……

札幌市立屯田西小学校 富田 泰

札幌大会の分科会は、公開研究授業後に座長を中心に話し合いをし、話し合いの内容を無理にまとめ上げることが目的とせず、造形教育の真の意味について互いに考えを述べ合い、学び合うことを基本とする新しい試みで行われた。そこでは、研究討議を深めるというよい効果ばかりでなく、研究会の楽しさ、気楽さや心の負担を感じさせない一つのよさがあったと思う。

この度、座長の役を受けその役割を十分に果たせたか反省する点も多々あるが、参加者が自分の思いを自由に発言し合う気軽な雰囲気であったことは喜ばしいことである。今回のように自由に話し合うことはあまりなく、参加者のそれぞれのイメージが異なり座長として話し合いが思い通りに進まなかった点もあるが、これからの方向性として大いに期待できるものであると思う。

また、研究実践発表者の三人の方の発表と話し合いの時間をより多く取り、もっともっと煮詰めればという思いを残しはしたが、それが失敗と言うよりも参加者にとっては、新しい研究会の在り方を学ぶ機会になったのではないだろうか。

「造形ともの・材料」の分科会では、造形活動の一つの大切な要素である「もの・材料」をどうおさえるかが話し合いの柱であった。「もののよさを生かし、ものと対話しながら楽しむこと」また、子どもがものと材料と語らう時間を保障することで「ものと一緒に共存」が生まれることが主張された会であった。表現に使う材料を子どもがどう扱うかを指導者は前もって十分に予測することが大切である。私たちは、造形活動のあるべき姿、支援の姿を常に考える姿勢を持たなくてはならない。

今回の研究会参加者は、たくさんの授業を参観し、たくさんの分科会を回るために、分科会では聞くばかりになってしまった方もあるようで、じっくりと一つの分科会の課題に取り組む姿があってもよかったと思う。分科会の話し合い内容を深めるためには、更に工夫が必要であろう。しかし、今回は今までの形式にこだわらない新しい研究会の体制、参加者全員が同じ立場で討議、論議するといった試みはこれから求められる一つの大きな研究会の姿であると思う。

伊藤 恵先生の記念講演会に参加して

札幌市立幌西小学校 箭内 浩之

伊藤先生の紙工作の作品は、直線的で幾何学的なものから曲線の多い面が合わさったものまで実に幅が広い。どれも、私にとっては複雑でどうやってつくるのか想像もつかないものばかり。今回紹介されていた、らせん状にねじれた立体や雪の結晶を立体にしたようなものも先生の説明を聞くと「そうか。」と納得してしまいました。しかも、先生の「駄洒落」ならぬ「おしゃれ」な講演に紙工作の楽し

たんけん美術館(三岸美術館)に参加して

旭川市立春光台中学校 小笠原信志

何かが違う「札幌大会」。時差式研究授業、座長制による分科会、移動も自由、美しく工夫された案内表示等々随所に参加者が楽しく参加できるような配慮が感じられ、「愛・感・美・遊・創」のテーマになるほどと感心させられました。

2日目の美術館鑑賞に参加してまたその感を強くもたざるを得ませんでした。近代美術館にはよく訪れることがあっても、隣の三岸美術館は素通りすることが多く、自分自身白紙の状態で臨めたことも幸いしたかも知れません。まず一つ感心させられたことは、札幌研中美部会で作成したワークシートです。大変丁寧に且つ興味をそえられる内容に工夫し編集されていることです。次に、鑑賞生徒を三グループに分け、ローテーションで鑑賞順を替え、より最適な鑑賞のさせ方を試みる方法もユニークなものでした。ビデオグループではメモを取りながら熱心に視聴している生徒も多く、学芸員の説明を聞く生徒の後ろ姿にも真剣さがみなぎっています。私自身も三岸好太郎・節子夫妻の世界に充分堪能させられました。この鑑賞の試みが、その後どう結論づけられるか楽しみに待っています。

いずれにしても美術館を巻き込んだ今回の試みには美術館との打ち合わせ、資料づくり等々相当なエネルギーを要したものであることが伺えます。また、美術館を利用した鑑賞指導のありかたをもう一度見直す必要があると同時に、これからの教育がもつめる目標「生きる力」や「ゆとり」の観点から見ても美術館のみならず各地域の文化施設を利用していくありかたを考える上でも大変有意義なものであったと思います。

テーマの通り今回の大会は、札幌の先生方の創意と熱意そして「愛」が確実に感じられたものでした。大変お疲れさまでした。ありがとうございました。

く素晴らしい世界に引き込まれてしまいました。

以前に、「先生は幾何学の研究でもされていたのですか。」とお聞きしたことがありました。先生は笑って否定されておりましたが、独自の研究は人一倍なさっておられるはずです。自分流の紙立体をつくるには、展開図の前に投影図か立体そのものを試作しなければならないそうです。他人に教えるときは、長さや角度を言えばよいのですが、その数字は先生の多くの試作から見つけ出されたものなのでしょう。「神(紙)業」は、熱心な研究から生まれたものなのですね。

加速するネットワーク

北海道教育大学附属札幌小学校 野切 卓

93年の旭川大会で生まれた全道造形教育ネットワークも、今年で4年目を迎えました。全道の造形の仲間を結びつける役割として、全18支部の名簿をまとめる活動などに取り組んできました。また、今年の札幌大会では、道立近代美術館でネットワーク会議を開催し、ネットワークの良さを生かした実践交流を行うことができました。

函館市立青柳小学校の高石悦朗先生は地域の特色を生かした写生会の指導について発表されました。函館の元町地区という歴史的建築物にめぐまれた同校ならではの写生会指導は大変興味深いものでした。

北海道美唄養護学校の金子裕美先生は養護学校の中での造形教育について話されました。「養護学校においても造形活動を通じて表現の喜びを感じさせたい」という金子先生の主張に「造形表現」の根本を改めて考えさせられました。

千歳市立青葉中学校の山田浩人先生はインターネットのホームページを使った児童作品の紹介について発表されました。インターネットによって地域の垣根を越えて交流が持てるという提言に、新しい時代の息吹を感じることができました。

提言の先生たちの熱のこもった発表の後、本部研究部から「北海道の地域性を生かした実践を各支部で行い交流しませんか」という提案がされました。

広い北海道を結ぶこの全道ネットワークがいよいよ本格的に動き出しました。

2日目をふり返って

札幌市立山鼻南小学校 益村 豊

生涯を通して生きて働く豊かな感性の育成をめざし、多様な価値や表現様式を認める立場にある、造形教育の担う役割は、昨今の国際化教育の流れの中で極めて大きいものがあります。札幌大会では、地域社会の公共教育的環境に目を向け、美術館を2日目の会場にし、ミュージアムスクールを参観しながら、各支部の実践交流や表現講演会を実施しました。豊かな美術環境の中で、参加者自らが感性を働かせ、美術に接する感動や創造の喜びをはだで感じ取ることができたのは大きな成果です。開かれた造形教育の可能性へ多くの示唆が得られました。



感・美・遊・創について

人間には理性的で形式的な要求と、感性的で素材的な要求があり、限定された人格でありながら、変化の中で持続する統一体でもある。つまり人間には二つの対立する衝動、すなわち、永遠不変の法則を求める「形式的な衝動」と、時間の中で変化する限定された「感性的な衝動」がある。

この対立する二つの衝動は、互いに他の活動によって自分も最高の能力を発揮するために、「遊動的衝動」という第三の衝動が必要となる。この第三の衝動が、理性を感性に、感性を理性に近づけて調和させる。それによって感性と思考、素材と形式、偶然と必然性が両立することができる。

感性衝動の対象は生命であり、形式衝動の対象は形態である。それ故に遊動衝動の対象は「生きた形態」でなければならない。ここでは生命が形態となり、形態が生命となる。人間はもっぱら素材や生命でもなければ、もっぱら精神でも形態でもない。この二つの対立する衝動の共同の対象が「美」である。

美は感覚にも思考にも自由を与える。美は人間を充実した無限性に置く。それによって、自由が人間に完全に取りもどされる。美は人間に自由という最高の贈り物を与えてくれる、第二の創造者である。

美的な気分は全てのものにたいする可能性の根拠であり、隔てない恩恵である。受動性と能動性、真剣さと遊び、静と動を結びつける最高の自由であり、純粋な美的な状態は現実には存在せず、芸術の中にしか存在しない。美が人間から自由な楽しみを誘いだし、静かな形式が粗野な生活を和らげる以前の人間は、いったい何なのでしょう。

——フリードリッヒ・フォン・シラー——

『人間の美的教育について』(1795年)

美とは、喜びの感覚と平和の感じを同時に与える体験なのです。他のいろいろなできごとのなかでは、まず喜びが与えられ、その後で平和が与えられるのですが、美においては、この両者が同時に体験されるのです。美は、静かでありながら、同時にこころをひきたたせるものです。美は、私たちの存在感を生き生きとさせるものののです。美は、私たちにおどろきの感情を与えるばかりではありません。それはまた同時に無時間性、つまりやすらぎを与えるものです。だから私たちは、美は永遠であるというのです。

美は、私たちのこころを魅惑する謎です。人間であることのより高次元なもろもろの体験と同じように、美はダイナミックなものです。やすらぎの感じというのは、これとは矛盾するものですが、絶対に欠けることはありません。やすらぎの感じが欠けているように見えるときには、それはもはや美ではないのです。

創造する力というものは、混沌のなかに形式(フォーム)を見つけるちからであり、まったくかたちのないところにフォームを創りだす能力なのです。

——ロロ・メイ——『美は世界を救う』(1985年)

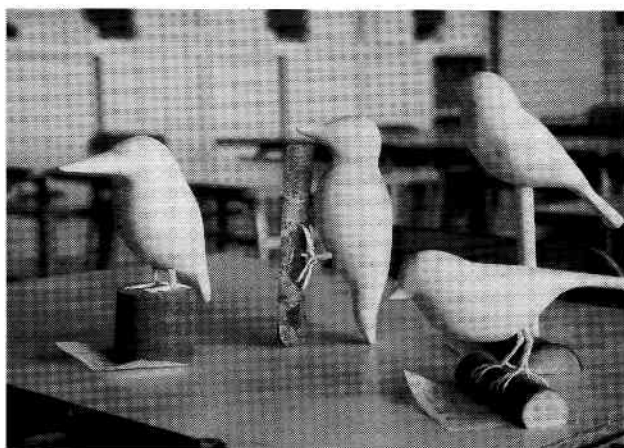


今こそ郷土根室を！ 地域題材に目を向けて

標津郡中標津町立広陵中学校
館 山 唯 郎

〈地域・学校紹介〉

北海道の最東端、根室管内（1市4町）は北方領土のひとつ貝殻島までわずかに3.7キロの国境の街であり、根室市から羅臼町までの海岸線の海域には、さんま、かに、ホタテ、北海しまえび、サケ、いか、ほっけ、昆布等々海産物の宝庫である。一方、少し内側の方に入っていくとどこまでも続く牧草地帯。のどかに牛が草を食んでいる情景には牧歌的な雰囲気が漂う。更にもう少し、山手に入っていくと知床連山から摩周・阿寒方面の山々につながっていく山脈がある。山の麓にはたくさんの野鳥が生息しており、鳥たちのさえずりが心地よく響く。山々の一つに秀峰武佐岳があり、その麓に中標津町が広がっている。武佐岳の山裾には開陽台という標高271メートルの台地があり、そこから根釧原野を見渡すと視界360度の大パノラマが広がる。まさに観光の色で派手に塗られていないそのままの自然がそこにはある。本校は来年開校20周年を迎えるまだ歴史の浅い学校で、中学校では道内一グラウンドが広い？らしく400メートルトラックで体育祭などをやってしまう学校である。自然に恵まれ悠々とした環境の中、子どもたちはのびのびと生活を送っている。

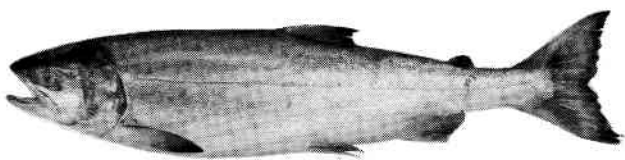


〈地域に題材を求めて その1～バードカービング〉

地域の合同の展覧会を見ても題材の類型化は否めない事実である。根室らしさ、中標津らしさの漂う造形の活動ができないものかと思案するようになった。中標津の地域性を生かし、野鳥のバードカービングをやることにした。それそのものは珍しい題材ではないが、自分たちの地域に目を向けること、生活実感に結びつけることで意義のあることと感じたのである。生息、または飛来す

る野鳥は、シジュウカラ、るりびたき、あかげら、あおげら、くまげら、かわせみ、るりかけす等々あげればきりがない。気に入った鳥を選び出し、木のブロックから面取り。後はひたすら扱い慣れないクラフトナイフで削っていく。実に根気の要る作業である。「かたい」「手が痛い」と言いながら、時にはカットパンのお世話になりながらだんだん形にしていく。大まかな削りを終え、いよいよヤスリがけ。粗めから細目へ、そして、仕上げに。夢中になってかけている。磨くという単純な作業だが、表面がつるつるになってくると本当にうれしそうであった。木のぬくもりを生かし着色はせず、完成。

合計12時間の労作だが、多少の抵抗感と困難さ、そして完成の喜びと言う点では、成就感のもてる題材であった。



〈地域に題材を求めて その2～鮭の皮〉

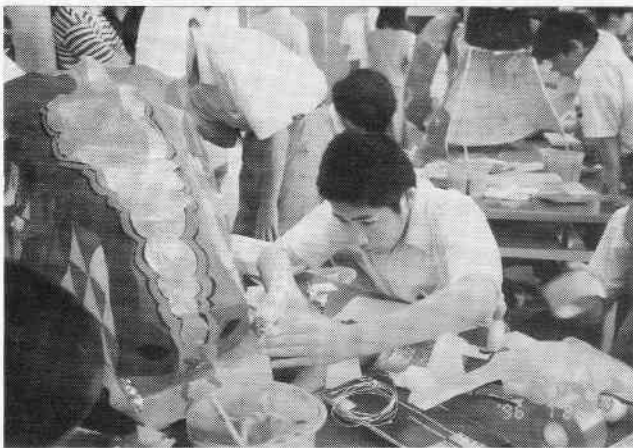
その昔、アイヌ民族がくつやかっぱなどを鮭の皮で作ったことはよく知られている。その堅牢性は実用であっただろう。また、鮭の皮を素材にした洋服や皮工芸品もあると聞く。装飾的な価値も見いだせる素材である。

くしくも中標津の隣町、別海町、標津町、羅臼町は鮭の好漁場である。秋になると川は鮭の遡上でいっぱいになる。こういう地域性からこれを使わない手はないと考えた。皮をうまくはぎ、そのまま乾燥させただけだが、丈夫で表面の模様もおもしろくみているだけで創作意欲が湧いてきて、教材化への確信を深める。

そして過日、標津町の教育委員会、漁協の計らいで100匹の鮭を破格の金額で手に入れた。先生方総動員で皮はぎ作業、そしてなめし作業。あとは、乾燥を残すあまりである。「素材から発想する」という観点で生徒に取り組ませようと考えている。あとは、生徒の料理方法に期待する。

〈最後に〉

平成9年度全道造形教育研究大会根室大会が開催されることになった。大会スローガンは「今こそ郷土根室を、豊かな感性で掘り起こそう！」である。素朴な根室の風土をそして造形活動を見に来根されますよう、事務局の一員として、また授業者としてお願い申し上げます。



あ と が き

研究大会の波紋が全道に広がっていく。また、各地
の中で新しい渦ができる。めまぐるしいけれど、核に
なるものがきっとあるはずだ。新しい年には一つみんな
なを“牛”といわせましょう。

広 報 部

安木 尚博(幌南小) 今 裕子(山鼻小)
益村 豊(山鼻南小) 伊藤 尚(米里中)
毛馬内國夫(桑園小)

